

令和元年度

都市計画道路はりまや町一宮線に伴う埋蔵文化財発掘調査

しんぼりがわごが
新堀川護岸

記者発表及び現地説明会資料



竹村家廃絶時の遺構

日時 記者発表 令和元年11月1日（金）午前11時00分～12時00分

現地説明会 令和元年11月3日（日）午後2時00分～3時30分

場所 横堀公園（高知市菜園場町1）

（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

高知県が計画している都市計画道路はりまや町一宮線の整備により、道路拡幅のため工事の影響を受ける部分について発掘調査を実施し、護岸の石垣および背面の遺構の内容を記録保存するものです。

(2) 調査対象地

横堀公園（高知市菜園場町1）

(3) 調査期間

一次調査 平成31年1月28日～3月31日

二次調査 令和元年9月26日～令和2年
3月（予定）

(4) 調査面積

一次調査 56㎡

二次調査 約300㎡（予定）

(5) 調査体制

調査委託者 高知県

調査受託者 （公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

(6) 調査協力

地域の方々、高知県、高知市



調査区の区分

2. 新堀川の概要

(1) 調査の経緯と経過

道路拡幅の計画がある横堀公園部分について、公園を開削し、現況の新堀川護岸の石垣を東側に移設する工事計画があり、「現在の石垣の裏側に古い石垣が残されていることも考えられるので事前に確認が必要」との意見が工事アドバイザー会議で提案され、これを受けて一次調査を実施しました。その結果、古い石垣は発見されませんでした。整備にあたって現状の石垣の形状や規模についての記録を残すことや石垣背面で遺構と遺物が見つかったことから、横堀公園の開削範囲についての面的な記録保存を目的とした二次調査を実施することになりました。

(2) 新堀川の概要

現在、新堀川と呼ばれている川は本来、江ノ口川と堀川を結ぶ「横堀」という運河でした。「新堀」と呼ばれていた部分は、横堀から西に「材木町」を横断し「紺屋町」まで伸びる部分を指します。それらを総称して「新堀川」と呼ばれるようになった可能性があります。高知城の外堀に

あたり、正保元年（1644年）に描かれた「土佐^{とさの}国城^{くにしろえす}絵図」に外堀として描かれています。現在のほりまや町界隈は「下町」と呼ばれ、市町を中心に商人や職人町が形成されていました。界隈にあった「材木町」の木材の運搬や、「紺屋町」など職人町の材料の調達など幅広い水運を支えてきた運河です。しかし、陸上交通の整備に伴う水運の衰退や、コンクリートの登場による



土佐国城絵図（国立公文書館デジタルアーカイブ）

る木材の需要減少に伴い新堀部分は明治から大正にかけて埋め立てられ姿を消しました。

堀の護岸はその土地の所有者が改修する傾向が強く、新堀川も例外ではありません。今回対象とした部分については横堀の東岸に「木屋」と号した商家「竹村家」があった場所であり、四国総合ビル、さえば耳鼻科、横堀公園の一角を幕末期頃所有していました。

「竹村家」の母屋や蔵などは戦後まで四国総合ビルの場所に残っていましたが、今は取り壊されています。当時の母屋や蔵の基礎としての護岸石垣は現在も新堀川に残っています。

3. 調査の成果

(1) 一次調査でわかったこと

古い石垣が残っているかどうかを確認するため、横堀公園の一部に試掘坑（トレンチ）を設定し調査を行いました。また、現在の新堀川の護岸に残っている石垣についても、石垣の積み方や、使われている石材などを細かく観察し、写真測量を実施し記録に残しました。旧新堀川の位置、痕跡を確認するため、新堀川西側のレーダー探査も併せて実施しました。

① 横堀公園の掘削調査

横堀公園の北西に2箇所、南西に1箇所、干潟に2箇所の計5箇所の試掘坑（トレンチ）を設定し、発掘調査を行いました。現在の横堀公園に整備された時の整地土の下から竹村家があった頃の遺構と遺物（明治期を中心とする）が出土しました。さらに、その下から江戸時代の遺物が確認され、横堀公園のある場所は江戸時代にも生活の場所として使われていたことが明らかとなりました。

干潟の発掘調査においては埋没範囲の胴木や、根入れ部分において旧橋脚の基礎の可能性のある木材が明らかになりました。

② 護岸石垣の調査

新堀川に使用されている石の材質や加工方法を観察しました。使用している石灰岩は高知県において採石可能なことや、架橋などの改修により使用されている石材が年代によって加工方法や技術が変化していることがわかりました。

横堀公園の新堀川に面した北側の石垣は、「亀甲^{きっこうづみ}積み」と呼ばれる積み方で積まれた石垣で

す。石は地元で採れる石灰岩を使用し、現場で形を整えながら石同士を隙間なく積んでいます。この技法は伝統的な手法を踏襲しており、連綿と受け継がれてきた技が反映されています。

竹村家の母屋や蔵があった横堀公園南部（現在の四国総合ビル）は、石灰岩以外の石も使用されており、各建物があつた場所ごとに違った積み方の石垣を見ることができます。「練り積み」というコンクリートを石垣の目地に使用しています。新堀川西側の護岸石垣は「矢羽積み」「布積み」といった多彩な積み方で、石材も花崗岩や砂岩、石灰岩など様々であり、形の整った同じ規格の「間知石」が使用されています。明治以降、昭和にかけて道路や橋梁などの整備に伴い、何度か積み直しながら現在に至っています。

③ 西岸のレーダ探査

レーダ探査は西岸における新堀の埋没を確認するため行いました。近代の開発の痕跡が甚だしく、レーダ探査の結果から正確な位置を把握することはできませんでしたが、一部で堀状の落ち込みの反応が確認されました。

(2) 二次調査でわかつたこと

※発掘調査は継続中で、以下の内容は現段階（10月上旬）でわかつている状況です。

竹村家の蔵の基礎、石列がみつかつています。（石列：桁行約4.6m×梁間3.2m、蔵の基礎：検出長4.2m×幅1m）基本的に石灰岩を使用しており、意図的に加工されている痕跡や、ハンダなども検出されています。

また、幕末から明治にかけて使われていた瓦や陶磁器などが多数出土しています。（出土遺物点数現時点約4000点 ※一次調査分含む）なかには、庭園部分だった箇所から泥面子などの玩具が多く出土しており、当時の子ども達がよく遊んでいたことがわかりました。

しかし、検出できた標高では満潮時に浸水します。一帯は昭和南海地震によって液状化していることがわかつており、昔と生活していた環境が変化している状況が読み取れます。



石列（上） 蔵基礎（下） オルソ

まとめ

1. 発掘調査を実施した横堀公園部分では、幕末頃から明治期を中心とする遺構と遺物が確認されました。
2. 現在の石垣護岸は、使用されている石材や積み方、加工技術などが、高知の幕末から明治、大正、昭和への移り変わりが色濃く反映されています。流通史、ひいては産業史を語る上で重要な変遷を残しています。
3. 今回の発掘調査を実施した地点は商家「竹村家」の屋敷地の一部であり、「木屋」と呼ばれた時代の一端をみることができました。当時の竹村家見取図や写真から母屋や、蔵があった場所を護岸石垣と対照し推定することもできました。

横堀公園周辺には、幕末の志士武市半平太の道場もあり、西郷隆盛が来高の際、木屋に宿泊した記録も残っています。新堀川界限は、幕末の志士たちも見ていた景観を現在に伝えてくれる重要な場所といえます。

謝辞

調査にあたっては多くの方々にご支援・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。今後ともご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



木杭出土状態



洞木、橋脚基礎出土状態



磁器皿（波佐見焼）



石製品（硯）

MEMO